

# オルテガの哲学思想

井上 正

## I

ホセ・オルテガ・イ・ガセット (José Ortega y Gasset) (1883—1955) の企図した哲学は、自ら「生・理性の哲学」(filosofía de la razón vital) と自称した哲学であった。それはすでに『ドン・キホーテに関する思索』(1914)において着想されていたが、『現代の課題』(1923)において、「生・理性」という用語を使い、その基本構想はかたまっていた。1934年に書かれ、遺稿となった『ドイツ人のための序文』の中で、キルケゴールに論及しながら、「私の船が到着した海岸は、そうしたあやしげなく実存的思考」ではなく、私がただちに「生・理性の哲学」と呼んだものであった。この生きた理性は、本質的、根本的には、生命的(vital)であるが、そのゆえをもって決して理性を軽んずるものではない」(OC, VIII, p. 47)と述べている。マドリッド大学の哲学の教授職最後の年(1936年)の講義題目も、「生・理性による形而上学の諸原理」<sup>(2)</sup>とされた。その原理的探究は、遺稿となった『ライプニッツにおける原理の理念と演繹理論の展開』(La idea de principio en Leibniz y la evolución de la teoría deductiva. OC, VIII, pp. 59—355)や『哲学の起源とエピローグ』(Origin y epílogo de la filosofía. OC, IX, pp. 345—434)などへと、晩年まで続いている。とりわけ、ライプニッツに関するそれは、近代・現代哲学についてよりも、プラトン、アリストレス、懐疑派、またスコラ哲学などへと分析を進めたものとして、オルテガ哲学を究明するうえで重要なものであろう。

後述するように、オルテガにとって、「根本

実在」は、外なる客体的世界にあるのでもなく、内なる主体・自我にあるのでもなく、「我とわが世界との共生」という日常生活の事実としての現実在である「われわれの生・各人めいめいの生」であると考えられた。そしてその「生きること」が、存在論の意味において、「存在すること」であるとみられた。したがって、生・理性(razón vital)による生そのものの存在論的探究に、「存在」ないし「実在」概念の根本的改革があるとして、オルテガは、「われわれは今日、思惟に関するデカルト主義ではなく、〈生に関するデカルト主義(cartesianismo de la vida)〉と称し得る状況にある」(OC, VI, p. 49)と言った。

デカルトは、『省察一』の冒頭において、「もし私が学問において、いつか堅固でゆるぎなきものを打ち立てようと欲するなら、一生に一度は、すべてを根こそぎにくつがえし、最初の土台から新たに始めなくてはならない」と言った。まさにそのように、オルテガは、環境世界と共生し共存する人間の生そのものに学問の土台を新たに打ち立てようとし、その基礎づけを試みたのである。その基礎づけのために、デカルトの懐疑の方法の再現ではないかと思われるほどに、その方法を用いている。しかしそれは、デカルトにおけるような数学的理性による方法ではなく、生・理性による方法によってであった。

## II

ところで、オルテガの哲学思想の本格的な研究は、わが国においてはもとより、スペイン以外の西欧においても、積極的に取り組まれていない、と言ってよいであろう。このことに関し、

ハーバート・リード (Herbert Read) は、オルテガに関する論文の冒頭で、次のように述べている。「オルテガは、いかなる意味においても保守的な思想家ではなかった。形而上学や倫理学においてはもとより、社会学、政治学、歴史、教育また文芸批評や伝記等、広汎な思想領域において、現代における最も雄弁、最も知的な思想家の一人であった。もしオルテガが、フランス語か英語かドイツ語で著述していたなら、彼の名前は、もうどこでも親しいものとなっているであろう。ところがオルテガはスペイン語で、世界にゆっくりと広がっているスペイン語で書いた。しかも加うるに、オルテガは、意識的に非アカデミックな哲学者であろうとした。それが専門学者の気に入らないし、出版業者にも喜ばれないというわけである。オルテガは常に、その生きた思想を、一つの堅固な体系の枠の中にとじこめるのをこぼんだ。最初の著作から最後のそれにいたるまで、いはば、経験に本質的な、あの多義性と複合性に向けて、開いた状態において。とはいえ、もちろんそれは、独自の立場をとろうとしなかったとか、必要な場合、自分の見解を示さなかった、ということの意味するものではない<sup>(3)</sup>と。リードのこの批評は適切であろう。

オルテガは、1910年から1936年まで、マドリッド大学の哲学の正教授の職にあったが、哲学する態度において、象牙の塔に閉じこもるというアカデミックな哲学的思索に安住することができなかった。それについては、あとで触れるように、その哲学思想そのものの性格にもよるのであるが、まずもってオルテガには、スペイン人を啓蒙し、スペインをヨーロッパの知的水準に引き上げようとの祖国愛と教育者の使命意識が強烈にあった。それで、「遊離した貴族主義的なやり方」はスペインではみのっていない事実からしても、「何事かを創造しようとする者は——創造はすべて貴族的であるが——広場の貴族にならねばならない」と考え、つとめて「知的な広場である新聞雑誌」に論説や評論を発表し、またそれを、自分の思想形成の場としたのであった (véase OC, V, p. 356)。

それだけではない。1915年には雑誌《España》を主宰し、9年後にはそれを廃刊して、《El Espectador》(傍観者)を創刊、1923年にはLa Revista de Occidente (西洋評論社)を創設し、同名の雑誌を発行した(1936年に廃刊されたが、1963年に復刊)。国民の知的レベルの向上のための、そうした精力的な、多彩な活動が、しかもニュアンスに富んだ文筆活動が、自国においてだけでなく外国においても、オルテガはすぐれた文筆家であり、評論家であるという印象を与えた。カミュ (Albert Camus) をして、「オルテガ・イ・ガセットは、ニーチェ以後の、おそらくヨーロッパ最大の文章家であろう<sup>(4)</sup>」とさえ言わしめるようになった。世人はオルテガのそうした啓蒙活動に注目して、新聞雑誌の論説に根拠を与えている哲学思想そのものへの注目が不十分であった。

外国では、オルテガは、『大衆の反逆』(La rebelión de las masas)の著者として喧伝されたが、その背後にある哲学思想をまず理解することが重要なのである。オルテガの高弟マリアスは次のように言っている。「この書(『大衆の反逆』)の本質的部分は、オルテガの諸論稿の全体に統一と意味を与えている哲学の必然的な表明として、とらえられるときのみ、つまり、背後にある、オルテガの新しい形而上学にてらしてのみ、全範囲にわたって十分に理解されるであろう<sup>(5)</sup>」と。

ところで、同時に注意すべきことは、オルテガは、いはば広場の哲学者であって、生・理性による哲学体系そのものが、フェラテル・モラが言うように、「開かれた体系」(open system)<sup>(6)</sup>であるということである。「その生きた思想を、一つの堅固な体系の枠の中にとじこめるのをこぼんだ」とリードが指摘したそのことは、オルテガの哲学体系そのものが、万人に向けて説かれた生きた体系であったということにほかならない。その意味で、新聞雑誌に載せた諸論文は、オルテガの哲学思想からの必然的な表明であったといつてよいであろう。

さて、リードが言っているように、オルテガがスペイン語で書いたということが、その思想

の普及のハンディキャップになっているという  
ことは、否定しえない事実であろう。しかし、  
スペインやラテン・アメリカ諸国の哲学者への  
オルテガの影響は実に大きい。マリアスは、そ  
の著『哲学史』の新版の終章において、「現在、  
その本質的部分を、なんらかオルテガに負  
っていないような、スペイン語による思考形式  
は存しないといってよいほど、それほどオルテ  
ガの哲学的影響は大きかった」と言っている。  
そして、オルテガの影響下にある人々を「マ  
ドリッド学派 (La Escuela de Madrid)」  
と呼び、17人の名をあげ、特に、スペインのモ  
レンテ (M. G. Morente), スビリ (X. Zubiri),  
メキシコのカオス (J. Gaos), アメリカの  
フェラテル・モラ (J. Ferrater Mora) の4  
人の思想を紹介している<sup>(7)</sup>。オルテガの死去直  
後、プエルト・リコ大学は、機関誌『ラ・トー  
レ』 (La Torre) を 600ページの大冊 (29人  
の寄稿) にして、オルテガ追悼号を出している<sup>(8)</sup>。  
これらことからしても、ラテン・アメリ  
カ思想界へのオルテガの影響は推察されよう。  
とりわけ戦後、ドイツでは異常ともいふべき歓  
迎ぶりで、70歳の記念の書を出すとともに、オ  
ルテガ全集4巻を出版した<sup>(9)</sup>。

### Ⅲ

オルテガはマドリッド大学でドクターの学位  
を得て、ドイツに留学し (1905—1907), 新カ  
ント学派のコーヘン、ナートルプのもとで、厳  
密な哲学的思考の訓練を受けた。したがって当  
然、カント主義に傾倒したが、カント生誕 200  
年記念論文『カント』 (1924) の冒頭で、「私  
は10年間を、カント哲学の内部で生きた。私は  
それを空気のように呼吸した。カント哲学は、  
私の家であると同時に牢獄であった」 (OC,  
IV, p. 25) と書いている。つまりオルテガにとっ  
て、その必要不可欠の牢獄を自分で生きること  
によって、そこから抜け出すことが課題であっ  
たのである。その間、多くの哲学思想を遍歴し  
たが、その中でも、ディルタイの生の哲学の影  
響を最も強く受けているといつてよいである

う。

オルテガは、フッサールの現象学にも関心を  
向け、これからの哲学は「現象学的方法」をも  
ってしなければならないと言ったこともあつ  
た。しかしオルテガは、現象学の標語「事象そ  
のものへ！」 (Zu den Sachen selbst!) は  
正しいとしても、その哲学の内容が、いまだ観  
念論的理性主義・主知主義を抜け出していない点  
に賛同できなかった。真正の实在は、いうところ  
の「純粹意識」の領域にあるのではなく、「  
私と私の環境との共存 (coexistencia) 共生  
(convivencia=co-living) としての人間の  
生、各人めいめいの生」なのであると、オルテ  
ガは主張した。自分の環境との共生としての各  
人それぞれの生、すなわち「私の生」こそが、  
「根本实在」 (realidad radical) なのであ  
る。「根本实在」であると主張するのは、各人  
めいめいの生が、崇高なものであると主張して  
いるのではなく、あらゆる事象は、どのような  
形においてであるにせよ、われわれ各人の生に  
関係して現われるという事実によって、各人め  
いめいの生が根本实在であると言っているの  
である。

広義にみて、自然、事物の存在論的優位を主  
張するのが、实在論 (realism) であり、精神、  
意識の優位を主張するのが、観念論 (idealism)  
であるとすれば、前者の自然主義的实在論  
は、ギリシア哲学の立場、後者の精神主義的観  
念論は、近代哲学の立場であると言うことがで  
きよう。ところでオルテガは、近代哲学の立場  
は受け入れねばならないとしながらも、それを  
さらに批評して次のように言う——近代哲学の  
祖デカルトが、「精神・我」を「思惟するも  
の」 (res cogitans=thinking thing) とし  
て物化 (ver-dinglichen) し、一つの物的存  
在、宇宙存在にしている以上、すなわち、伝統  
の実体概念の枠に入れてとらえている以上、「  
近代における〈精神〉という概念は変装自然主  
義 (un naturalismo larvado) である」 (OC,  
V, p. 30) したがって、近代哲学において  
形而上学の真に根本的な変革があったわけでは  
ないと (cf. OC, VI, pp. 29—31)。そこでオル

テガは、私を取り巻く環境との共生・共存としての私の生・生きている私こそが、新しい実在概念、存在概念なのであると主張した。すでに1914年に発表した『ドン・キホーテをめぐる省察』において立言した「私は私と私の環境である」(Yo soy yo y mi circunstancia.) (OC, I, p. 322) という命題は、オルテガの哲学思想の根本命題を表現したものであった。

人間的生にあっては、「私」が優位なのでもなく、「環境」が優位なのでもなく、両者は原初からしてダイナミックである。「根本実在・人間的生は、意識から成っているのではなく、ゲーテのいう、かの一つにして二つである Gyngko-biloba (銀杏の葉) のように、根源的な帰一的二元性である。われわれの生、各人めいめいの生は、〈われとその環境〉との動態的対話 (el diálogo dinámico) である」(OC, VIII, p. 43)。オルテガがしばしば、「生はドラマである」と言い、「生は、われわれの為すところのものであり、起ってくるところのものである」(OC, VII, p. 414, etc.) と言うのも、それゆえにであった。

さて、注意すべきことは、オルテガは、実在に関して、新しい理論を構築して、「生」が根本実在であるのだと立論しているのではない、ということである。「生」は、われわれが日常、〈私の生活〉と言っている平凡な事実、自明の事実を指している。しかしそれは、最も平凡な事実であっても、最も重大なことなのである。従来の実在概念は、すべて一つの理論であり、解釈であった。それに対し、オルテガの言っている「私の生」は、一切の理論や解釈に先立って、いや応なしに、世界の中でわれわれの出会う「素裸の実在」、「原初的、第一実在」であると言っているのである。人間は、何故にかも、どういう風にかも知らずに、突如、自分に出会い、自分を発見し、同時に、世界に出会うのである。その意味で、オルテガは、生は「所与」であり、「出会い」であり、それは、生のカテゴリーの一つであると言う。

したがってオルテガの哲学は、meta-physics (自然学以後) をでなく、ante-physics

(自然学以前) を問題にしているのだと云ってよいであろう。したがってそれは、伝統の哲学とは方向を異にするものであるとも言えるであろう。人間の生は、〈かなた〉にあるのではなく、〈ここに〉ある。だから、オルテガは、ヘーゲルのかの有名な句を用いてこう言った——Hic Rhodus, hic saltus. (ここがロドスだ、ここで踊れ)。Aquí está la vida, aquí hay que danzar. (ここに生がある、ここで踊れ) (OC, IV, p. 398, VI, p. 32)。

総じて、オルテガの哲学は、現実から抽象された、概念的な〈世界〉や〈我〉から出発する哲学ではなく、両者が共に在り、共に生きる現実の生に立脚する哲学である。その意味で、オルテガは、万人が真実に生きることの哲学の基礎づけを、企図していると言ってよいであろう。

#### IV

『現代の課題』(1923)において、オルテガは繰り返し、「純粋理性」(razon pura) は「生・理性」(razon vital) に、その席を譲らねばならない。生・理性の中に純粋理性は位置づけることができる、と述べ、そこに現代の課題があるとして、生・理性の理念を提唱したのである。

理性主義(合理主義)、主知主義として特徴づけられる近代哲学の理性は、「物理学的・数学的純粋理性」であった。そして、この純粋理性の権威が、次第に絶対視され、この種の理性が、理性のすべてであるかのごとく思い込まれるようになった。ところがそれが、生の歴史的現実の把握に失敗するや、そうした思いなしが独断であり、偏見であることが意識され、19世紀中葉以来、非理性主義(非合理主義)の哲学的主張が高まってきた。

ところが、その主張には、反動的に、理性主義を拒否するだけでなく、あらゆる理性を拒否し、排斥してしまう反理性への偏向があった。生氣論(vitalism)のごときは、その代表的なものである。しかし、理性、知性なき人間的生

というがごときものはありえない。そこでオルテガは、われわれが日常生活において、自然にはたらかしている、その理性に着目した。その理性は、生活の中で「生きている理性」(razón viviente, living reason)である。この理性を、オルテガは、「純粋理性」(razón pura)に対して「生・理性」(razón vital)と呼んだのである。

オルテガが近代哲学における「純粋理性」を批判したのは、それに基づく近代科学の専門分化と技術化の進歩に伴い、「科学人」という専門的人間が急激に増加し、その様々な専門家が、人間生活一般を支配するがごとき状況をみただけからであった。そうした状況を「専門主義の野蛮性」という極端なとらえ方をして論じているが<sup>(11)</sup>、それは決して、理性を否定したのではない。わずかに数世紀の間に、近代文明の驚くべき繁栄をもたらした数学的理性の理念は、これからも維持されねばならない。ただし、その理性は、その抽象性のゆえに、生の歴史的現実を総合的に、また具体的にとらえる能力に欠けている。したがって、真実の人間の生を、全体的に方位づける能力に欠けている。それゆえ、純粋理性を排除するのではなく、それを、一つの道具として、われわれが生きてゆく生きた理性、すなわち、「生・理性」(razón vital)の基礎づけが必要である、とオルテガは主張するのである。『哲学とは何か』においては、次のように述べている——「ベルグソンが見事に言ったように、〈理性は、良識によって監督されねばならない〉。物理学によってでなく、ベルグソンが〈良識(buen sentido)〉と呼んでいるものが、私がきちんと形式づけて〈生・理性(razón vital)〉と名付けているものに当る。これは、他の理性よりもずっと広汎な理性である。なぜなら、古い理性、概念的理性、純粋理性からすれば、明らかに非合理的とみなされる多くの対象が合理的なものとなるからである」と(OC, VII, p. 327)。

そうした「良識」、「生・理性」が、われわれの現実の生活において大切であることは、誰もが言うことであり、気づいていることである

う。誰もが口にしているそのものを、これからの哲学の重要問題として、真正面に取り上げ、その哲学的理念を探究しようとしているところに、オルテガの哲学思想は万人の哲学とも言うべき特色をもっている、と言ってよいであろう。では、そもそも生・理性とは何であり、何であらねばならないのか。

われわれの生、各人めいめいの生は、与えられたものであって、「宇宙の根本的所与」(el dato radical del Universo)である(OC, VII, p. 403)。しかし、「出来上がったもの」、「充足存在」として与えられていない。だからわれわれは、環境世界の中で、常にそれとかわり、交わり、何事かをなし、なすことによって、より充実した自己を形成してゆかねばならない。つまり、所与としてのわれわれの生は、課題として与えられているのである。そしてその自己形成の「課題」(quehacer)は、各人の「為さねばならない」(tener que hacer)使命であり、各人の心の奥底から出てくる「呼び声」であり、「生の命令」(imperativo vital)<sup>(12)</sup>なのであると、オルテガは説いた。

ところでその際、われわれの所与環境の提示する可能なもののうちから、自分に最も適した行為を選択し決定しなければならない。しかしそのためには、われわれの環境(自然、社会、歴史、文化、制度習慣等、自分を取り巻く一切)に関する、一定の知的解釈ないし思想を、あらかじめ用意せざるをえない。その思想に照らしてのみ、ある行為を他の行為よりもよしとして決定することができるからである、つまり、真に生きてゆくことができるからである。換言すれば、生きてゆくためには、われわれは、自己の行為を説明することができねばならないのである。その点では、生は「自己弁明」なのである。それゆえオルテガは、「理性」という言葉の根源的意味は、「或ることを明らかにすること、弁明すること(dar razón=etwas erklären=von etwas Rechenschaft ablegen——プラトンの λογον διδοναι)(OC, III, p. 273)にあるとして、知識の第一義は、生において「自分は何を根拠としなければならないか

を知ることであり」と主張した。生を真正に生きるためには、われわれは、オルテガの言う、そうした知を避けることはできないであろう。

したがって、「生きるとは、仮借なき環境に直面して、思考し判断せざるを得ないということである」(OC, V, p.67)。つまり、理性(知性)なき生はありえないのである。そこでオルテガは、razón vital(生・理性)は、より正確には、「生そのものと同一である理性」(ibid)であると言っている。それゆえそれは、マリアスの言うように、「生である理性」(la razón que es la vida)<sup>(13)</sup>、あるいはフェラテル・モラのように、「理性としての生」(life as reason)<sup>(14)</sup>と言ってもよい理性なのである。要するに、razón vitalは、自分を取り巻く環境世界に関する知識、思想を獲得し、用意することのできる能力であると共に、自己の態度決定、行為決定の根拠理由を表明し得る能力なのである。

真正の人間の生は、いきなり、思いつき次第の直接行動に出たり、身の諸事象、諸思想に翻弄されたりはしない。直面する環境世界との直接のかかわりを、いったん中止して、かのデカルトが焔部屋に引きこもったように、自己の内部に引きこもり、沈思熟考する。オルテガは、この「自己沈潜」(ensimismamiento)の能力を、人間性の特色として、さまざまな面から、繰り返し力説し、強調した(とくにOC, VII, p.79ss.参照)。真正の生は、自己の内面に沈潜し、孤独になって、環境に関し、また環境の中での諸可能性に関し、徹底的に考察し黙考して、ゆるぎなき明証性をもって自分の確信する考え、すなわち、「自己自身と一致した思想」を求める生なのであると、強調するのである(オルテガは、その個人的生における在り方を、社会的・集团的生についても適用する)。

そのような、自己自身と一致した、主観・客観的な思想は、自己内沈潜して、「生を度外視すること」(des-vivir=de-living)において可能であるが、それは、生における「虚偽の態度」なのではなく「仮の態度」であって、積極的な意味をもつ態度なのである。その意味で

それは、世界にかかわる「生の一形態」としてとらえねばならない。すなわちそれは、生の一形態としての「理論的生」(vida teórica)なのである。理論的生は、仮に実践的生を括弧に入れて、諸事象そのものの固有性に関心を向けるのである。その際、大切なことは、無私の態度で臨まねばならないということである。そのような意味で、オルテガは、「観照は転住の試みである」として、その根底においては、愛の行為であるとも言った。

そうした態度において成立する主観・客観的な理論は、生きた理論であり、思想であろう。すなわちそれは、ただちに、「生の計画」(projecto vital)となるころの理論であり、それによってただちに、生きてゆくことのできる信念・思想なのである。このように考えてオルテガは、真理は、単に客観的、科学的な純粹真理にあるのではなく、「自己自身との一致としての真理」、換言すれば、それによって、われわれが生きてゆくところの真理でなければならぬと主張した。そして、〈私(われわれ)はかくかくの信念である〉と言い得る、そうした真理を、「生きた理念(ideas vivas)」、「確信(convicciones)」、「信念(creencias)」などの言葉で表現した。

## V

### 1. 遠近法主義(perspectivismo)

生は常に限定された時空的な展望(perspectiva)である。超年代の生もなく、ユートピアの生もない(utopiaの語意は、〈場所がない〉)。オルテガは早くから、『真理と遠近法』『現代の課題』などにおいて、ライプニッツの示唆をもうけて、「あらゆる生は宇宙に向かう一つの視点である」という遠近法の理念を説いた。

実在は、風景を見る場合のように、どの展望に対しても同様に実在性を提供する。また、各人の見る風景がそれぞれ相違するように、実在の展望もそれぞれ相違し、或る生の見ると同一のものを、他の生は見ることができない。

しかしそのいずれもが、真理の一次元をうつしている。そのように、個人にしる民族にしる時代にしる、歴史的経過における一定の位置を占め、それぞれに生命ある文化をつくってきた。それは過去のものであっても、真理の一次元を保有している。遠近法は、決して実在の「変形」ではなくして「構成要素」である。かつまた、個人であれ、民族であれ、時代であれ、いずれにせよ、「あらゆる個体は、真理把握のための、かけがえのない機関なのである」(OC, III, pp. 199—200)。

そのような、真理に関する遠近法主義は、相対主義であると言わねばならないであろう。オルテガも、生・理性は、遍在的、絶対的な視点、スピノザのいわゆる「永遠の相のもとに (sub specie aeternitatis)」立ち得るものではなく、常に「時間の相のもとに (sub specie temporis)」, 事物, 世界を見るものであることを強調している。しかしオルテガは、「為されたもの (res gestae)」としての「歴史」は、「十分な理由をもたねばならない」、すなわち、「物語る理性 (歴史的理性)」による「合理的な構造」ないし「体系」をもつべきである。従って、その相対的な真理体系は、超越的・永遠的なものと対立するものではない、とそう考えた。それゆえ、相対的価値を救うために永遠的価値を拒否するような、19世紀の歴史主義や実証主義を批判し、「時間的」と「永遠的」の両者を結合する理念を探求しようとの意図のもとに、遠近法主義の立場をとったのであった。

## 2. 歴史的理性

生は歴史的である。それ故、オルテガは「生・理性 (razón vital)」を「歴史的理性 (razón histórica)」とも呼んだ。『体系としての歴史 (Historia como sistema)』などで、とくにその側面から、生の在り方を論じているが、その歴史的理性が、ディルタイにおけるそれに関連があることは容易に想像されよう。しかしオルテガの「生・理性」の理念の構想は、ディルタイの思想を知るまでに出来あがっていた。だからオルテガは、『ヴィルヘルム・ディルタイ

と生の理念 (Guillermo Dilthey y la idea de la vida.)』の中で、「私の問題と立場は、ディルタイのそれと一致するものではなく、私は、最初からすでに、生の理念に関して、ディルタイを越えたところから出発している」(OC, VI, p. 175)と言っている。しかし、哲学の歴史的関連から見れば、ディルタイの「生の哲学」が、オルテガの「生・理性」の理念の展開のための一つ前提となっているだろうことは、否定しえないであろう。

ここでは、両者の関連と相違に立ち入る余裕はないが、ディルタイの「歴史的理性 (historische Vernunft)」は、客観化された歴史、文化を「了解する」原理、あるいは「精神諸科学」の基礎づけのための原理として提唱されたものであった。したがって、歴史を創造する主体的・自発的側面が軽視されていることは否めない。ところがオルテガは、むしろ「未来を指向する生の構造」の究明に重点をおいた。「われわれは最初から未来へ向けて生きている」、しかし「われわれが未来を実現する方途を見出し得る唯一の宝庫は過去である」(OC, V, pp. 49, 93)と言い、過去、歴史の考察とその理解の不可欠性を強調した。そしてその強調は、人間の生が未来を指向する生であるがゆえにであった。

## 3. 宿命と自由

われわれは未来に向けて生きているとしても、その方向が決定されているわけではない。だから常に、自分が為そうとすることを、つまり自分がそれで在ろうとするものを、自分で決定しなければならない。換言すれば、その選択決定の自由が強いられている。「私は自由を強制されている。いや応なしに私は自由なのである」(OC, VI, p. 34)と、オルテガは言った。<sup>(15)</sup>

しかしオルテガは、われわれの生が与えられたとき、同時にそこで生きる環境世界も与えられているから、環境世界を選ぶ自由はなく、まずその世界を受け入れなければならない、したがって行為の可能性には、ある制限がある、とそう考える。そしてそこに、生の宿命 (fatalidad) の次元を認めた。そして、未来へ向けて

の生の創造活動の自由は、宿命としての所与環境の中でのそれであると言う。つまり、「生は宿命でもあり自由でもある。所与の宿命の中の自由である」(OC, VI, p.431)。だからこの意味で、上述で触れたように、生の方位決定に際し、われわれの歴史を顧慮することの重要性を強調したのであった。

いかに困難な、悲劇的な運命であっても、それを甘受し、耐えて、創造へと努力するところに、真に人間的な自由がある。またそれが真の「英雄的精神」である。仮借なき環境を客体的な宿命としてその中にありながら、自己内沈潜して考察し熟考して、主客合一的にきめた信念を、自分の「定め」(destino, destiny)とし、使命として、その遂行に努力するのが英雄的生である。

オルテガは『哲学とは何か』の最後を、一茶の俳句を借りて、「<露の世は露の世ながらさりながら>……さりながら！ われわれはより完全な生を形成する素材として、この露の世を受け入れてゆこう。」と結んでいるが、その主旨は、上述のような精神からしてであった。

(一茶の俳句そのものの解釈としては、オルテガは間違っていよう。この句は、一茶が愛児さと女の死をいたみ、この世は無常と承知しているが、それでもやわり、あきらめきれないという悲哀感を吐露したものであった。ところで、俳人一茶の作詩態度からみれば、そうした悲痛な現実のただ中に身を置き入れて、それを客観化し作品化したから、感銘的な、生きた表現を生み出したのだといえよう。とりわけ一茶は、その数奇な環境、運命を受け入れ、その中で力強く生きてゆくことが、すなわち彼独自の作品を創作することであり、同時にそれが、彼の生の形成でもあった。彼は、悲痛なその句をも入れた俳諧日記を『おらが春』という陽気な題名にさえして、俳諧一筋に生き抜いた。彼の作品や生き方の客観的評価はともかくとして、人間、一茶の「生」に着目して上の句をみると、われわれでも生活意欲を表現した一句として解釈したくもなろう。「東洋人は、生命的な文化を求めてきたから、文化と生活を切り離

して考える習慣をもたない」(OC, III, p.172)といいもし、また、「世界中で最も簡素な詩、驚嘆すべき詩」(OC, VIII, p.445)として、俳諧に特別の関心をいただいていたオルテガが、日本の俳句を用いて、『哲学とは何か』を結んでいるところに、私はなにか示唆的なものを感じずる。) )

#### 4. 明るさへの意欲

まえに引用したように、H.リードは、「オルテガは意識的に、非アカデミックな哲学者であろうとした」と言っているが、オルテガは決して、大学の自由・学問の自由といわれるアカデミズムの本質を軽視したのではない。ではなくて、近代観念論哲学における、内在的な主観主義、精神主義への偏向、そうした「自閉主義(hermetismo)」のアカデミズムを克服し、新しい開放的なアカデミズムを意欲したのである。

ところで、オルテガにとってその克服は、生における弁証法的な止場であった。「すべて克服することは維持することである」(Toda superación es conservación.) (OC, VII, p.404)と言っているのも、その意味においてであった。オルテガの生・理性主義における真理は、主体性を含みながら、世界において世界と共に生きるという、動態的、統合的な、そしてこの意味において、開放的な、開かれた真理でなければならなかった。人間的生との関連の中でとらえる主・客統合的な、生きた学的真理を目ざす限り、そのようなものでなければならぬであろう。1948年、マリアスと共に、「人文学研究所」(Instituto de Humanidades)を設立したオルテガの意図も、そうした哲学思想に基づいていた。

さて、哲学における開かれた真理への意欲は、同時に、真理の「明るさ(transparencia)」への意欲でもあった。オルテガは、ゲーテが「私は、明るみをあこがれ、暗がりから出ようと努力する人びとの血統を受けた一人であることを言明する」と言った、この言葉を引用しながら、次のように説いている——「哲学は、明るさ(transparencia)への大きな欲求であ



り、真昼間への断固たる意志である。哲学の根本的な企図は、隠れたもの、蔽われたものを、表面へと持ち出すこと、覆いを取ってあらわにすることにある——ギリシャでは哲学は、まず、みずからalétheia (ἀληθεια) と名のることから始められたが、アレーティアは、明らかにすること、蔽いをとること、要する明示すること (manifestación) を意味する。明示することは、語ること、ロゴス (lógos, λόγος) にほかならない。」(OC, VII, p. 342) と説いている。

思想における「暗さ」は「深遠性」を、「明るさ」は「表層性」を意味する。神秘主義は、計り知れない深遠を思索するが、哲学はその反対に、深みから表面の明るみへと出てくることに関心事なのである。もちろん哲学も、「深さ」が必要であるが、その深く隠れているものを、表の明るみへと開示すること、すなわちギリシャ哲学におけるアレーティアこそが、真理探求の根本使命であるとして、オルテガは、哲学は明るい表層性への不断の意欲であると主張するのである。

オルテガのそうした哲学的精神は、象牙の塔から公衆の広場へ出て、彼らに呼びかけるという姿勢ともなり、また哲学的思考におけるスポーツ的な「明朗さ」の要求ともなっている。あるいはまた、人間が真に自覚存在し、実存し得るのは、「不安」においてではなく、「平安 (calma)」においてでなければならないと主張するのも、上述のような哲学的態度を背景にしての発言であると推察される (cf. OC, VII, pp. 23—24)。

1951年、ドイツのダルムシュタットにおいて、当市主催の『ダルムシュタットの討論』(Darmstädter Gespräch) が開催された。それは「建築」をテーマとするものであったが、ハイデガーとオルテガは特別に招へいされ、ハイデガーは『建てる、住む、思索する』(Bauen, Wohnen, Denken.) と題し、オルテガは『技術の背後にある人間の神話』(Der Mythos des Menschen hinter der Technik.) と題して講演した。しかし、出席者は、その多くが諸大学の教授であったとしても、主として工学

関係の教授たちであったであろうから、ハイデガーの発表は難解であったであろう。そのことは、発表後の聴講者の討論を読んでもわかる。<sup>(17)</sup>

さて、その2年後の1953年、オルテガは、『〈ダルムシュタットでの議論, 1951年〉をめぐって』と題する小論を書いている。その中で、「ハイデガーの思想は、つねに深い。そのことは、今日の最も偉大な哲学者の一人であるということの意味している。……(けれども)私は、ハイデガーは深いだけでなく、加うるに、深くあることを欲しているということをつげ加えなければならない。そしてそのことは、それほど評価すべきことではないと思う」(OC, IX, pp. 631—632) と言い、続けて次のように述べている——「哲学は深層へのみ進むものではない。哲学は往復の旅である。それ故、深層のものを表層へと引き寄せて、それを明白に、透明に、自明のものにするべきである。フッサールは、1911年の有名な論文<sup>(18)</sup>において、いつも賞讃されてきたもの、すなわち深遠 (profundidad) は、哲学の不完全性であると考えている。哲学は、隠れているものが的確に見えるように、深いものを浅いものにして、デカルトが言ったように、〈明晰・判明 (clara et distinct)〉な概念に達しなければならない。われわれもすでにデカルト主義を継承しているかぎり、この定めに変りはない。哲学するということは、深める (profundizar) と同時に明らかにする (patentizar) ことである、すなわち、奥のもの (lo profundo) を表へと転向させるために、実在を翻転する熱狂的な努力である (OC, IX, p. 632)」と。

『ドン・キホーテをめぐる省察』(1914) の中で、すでにオルテガは、ゲルマン文化の深さ・暗さとラテン文化の浅さ・明るさを比較して、後者を、「地中海的文化」、「地中海の明るさ」であるとして、その高揚の必要性を説いていた (cf. OC, I, pp. 341—349)。そうしたオルテガの哲学的努力は、諸学が深く専門化し、分化した近代文化の複雑さの中で、そのジャングルの中で生きている現代人の生を、真昼の明るみの地平へもちきたそうとの努力であった、

とそう言うてよいであろう。<sup>(19)</sup>

註

- (1) OC, VIIIは、オルテガ全集 (Obras Completas de José Ortega y Gasset, 11 vols., Revista de Occidente, Madrid 1946—1969)の第八巻を示す。  
レビスタ・デ・オクシデンテ社は、上記の全集のほかに、El Arquero と称する、四六判ぐらゐの紙装判の双書45冊を出している。ちなみに、ドイツ語訳の全集, Gesammelte Werke, 6 Bde., Stuttgart 1978. がある(4 Bde.は1954—56に出版されていた)。英訳の全集はないが、単行本として、主要なものはほとんど訳出されている。
- (2) これは、オルテガが、マドリッド大学教授として、職務上、届け出ている講義題目である。その講義原稿を写して、これを、Unas lecciones de metafísica と呼んで、エル・アルケロ双書の vol. 45をそれにあてている。この講義は全集には入っていない。
- (3) Herbart Read (1893—1968) : Mediodia y noche oscura, Algunas observaciones sobre la filosofía del arte de Ortega y Gasset. (『真昼と暗夜——オルテガの芸術哲学の若干の考察』) en: Revista de Occidente, Núm. 40, 1966, pp. 1—2.
- (4) New York の Norton 社は、オルテガの諸著の英訳本を出しているが、その英訳本の巻頭でオルテガを簡単に紹介した文のおわりに、"Ortega y Gasset, after Nietzsche, is perhaps the greatest 'European' writer." —Albert Camus と引用している。
- (5) J. Marias, Obras V, P. 317
- (6) Ferrater Mora, Ortega y Gasset—An outline of his philosophy, Revised Ed., 1963, P. 2
- (7) J. Marias, Historia de la filosofía, 19ed., 1966, pp. 430f., 449—455.
- (8) La Torre (Revista general de la Universidad de Puerto Rico), Homenaje a José Ortega y Gasset, Núms. 15—16, 1956.) これにはドイツで著名のオイゲン・フィンク (Eugen Fink) も寄稿している。ちなみに、スペインでの追悼号は、Revista de Filosofía, Núms., 60—61, ベネゼラでは、Homenaje a Ortega y Gasset, J.

D. Garcia Bacca, ed., Caracas (Instituto de Filosofía) 1958.

- (9) 70才の記念の書は、José Ortega y Gasset, Zu seinem 70. Geburtstag, Stuttgart, 1953.  
オルテガの Gesammelte Werke 4 Bde. は、スペイン語の全集の第六巻までを底本として、オルテガが自選したものである。現在出ている 6 Bde. は、それに 2 巻を追加したものである。
- (10) ゲーテの西東詩集『ズライカの巻』の「いちぢょうの葉」(Gingko-biloba) 参照。Goethe Werke, Hamburger Ausgabe, Bd. 2, S. 66
- (11) La rebelión de las masas, c., XII, La barbarie del especialismo. (OC, IV, pp. 215—220)
- (12) Cf. Historia como sistema, OC, VI, P P. 9—50. Misión del bibliotecario, OC, V, P P. 207—234.
- (13) J. Marias, La Escuela de Madrid, 1957, P. 157
- (14) Ferrater Mora, Ortega y Gasset, 1992, P. 44
- (15) オルテガのこの言葉は、『体系としての歴史』(Historia Como sistema) (OC, VI, P P. 11—50) の中で言われている。この論文が、最初に発表されたのは、Ernst Cassirer の 60歳記念論文集, Philosophy and History, edited by R. Klibanisky and H. J. Paton, Oxford 1936. においてであった。オルテガの表現そのものは、サルトルが、「人間は自由の刑に処せられている」と言ったその表現と似ているが、両者の意味内容は大きく相違している。また、サルトルのその表現が書かれている、L'existentialisme est un humanisme. は、1946年に出版されている。
- (16) 『「人文学研究所」趣意書』(Prospecto del Instituto de Humanidades) (OC, VII, P P. 9—24) は、オルテガの Misión de la Universidad (OC, VI, P P. 311—353) の拙訳『大学の使命』(桂書房, 1968) の付録として訳しておいた。
- (17) この Datmstädter Gespräch は、ダルムシュタット市役所及びこの討論会の委託によって、Otto Bartning が編集し、Mensch und Raum という書名にして、1952年に出版されている。それは、研究者の発表はもとより、それに関する聴講者の質疑応答も、その通りに印刷され、さらにその際の聴講者の〈Beifall (賛成)〉、〈Lachen (笑い)〉といった反応をも、らん外に印刷している。

- (18) E. Husserl, Philosophie als strenge Wissenschaft, in: Logos, Bd. I, 1911, S S. 289—341.
- (19) 拙論『生・理性の哲学——オルテガ哲学研究——』(広島大学教養部紀要Ⅱ「人文・社会学」第一集, P P. 53—108), また「オルテガ著作集」(白水社)第一巻の私の『解説』(P P. 341—352)を参照いただければ幸いである。